
蒼き月夜

御幡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼き月夜

【Nコード】

N7886S

【作者名】

御幡

【あらすじ】

ふらりと吉原に現れた無口無表情の女性。

彼女の名は蒼狗田叉奈。そらいぬくたな

かつて銀時や桂と共に戦場を駆け抜けた旧友である。

そんな彼女が江戸に上京したのはかつての盟友たちに逢いにきたというのだが…。

その一人は銀時たちと袂を別れた奴で！？

オリキャラ設定〱中途半端ですいません〱（前書き）

オリキャラ設定です。

といっても、そこまで詳しくはありません。

オリキャラの格好とか、そんな感じです。

気が向いたら読んじゃって、くらいのレベルなんで。

オリキャラ設定、中途半端ですいません、

蒼狗田 叉奈 (そうくだ さな)

赤みがかかった長い黒髪に青がかかった瞳が特徴の女性。

淡い桜色の小袖に紺色の袴をはいている。

銀時や桂、坂本に高杉の旧友であり戦友。

攘夷戦争に参加した過去があり、その際四人に出会った。

いつも無口無表情のため、いまいち考えている事が分からない。

かなりの美人であり、月詠曰く吉原で働いてもいいほどのこと。

真顔でとんでもない爆弾発言を吐くなど、意外に漫才の素質があったりもする。

下ネタにも対応でき、その際は銀時と手を組んで桂を悩ませたりもしたらしい。

喋り方が女性というより少年に近い。

簡単にいえば女性らしい言葉使いをしない、ということ。

実は銀時より年上。

の割には若々しく、モテたりするも又奈本人が全面拒否し、その相手を半殺しにするという警察沙汰になりそうなことを仕出かしたりするある意味危険な人物。

戦闘能力は高め。

銀時や高杉達には及ばないものの、そこらへんの攘夷志士くらいなら楽勝とのこと。

体術を習得済み。軽い身のこなしで相手を翻弄するタイプ。

また、ナイフや苦無の扱いに大変長けており、その腕のみなら高杉や桂をも超える。

戦争時も刀より苦無を使用していたらしく、それで相手を薙ぎ倒して行ったらしい。

現在は苦無はやバイだろうという理由でナイフを持ち歩いている。

そのナイフの数は未知数。

どこからともなく現れるナイフは最高で70本だとか。

そこまできるともはやマジシャン並みである。

江戸に上京してきたのは旧友に会いにきたため。

気まぐれでそう思い、やって来たという意外に行動派な女性である。

オリキャラ設定〱中途半端ですいません〱（後書き）

はい、かなり短いですね！

まあ他にも謎があるでしょうが、それは本編で！
失礼いたしました。

プロローグ（前書き）

どうも、御幡です。

オリキャラありの恋愛なしな小説なんであんまり期待して読まない
てください。

でも頑張ったんで、読んでくださったら嬉しい限りです。

プロローグ

女は立っていた。

真夜中に潮風吹く港でたった一人。

長い髪を揺らしながら夜空に浮かぶ蒼い月を見上げている。

そして女は一言、呟いた。

まるで誰かの事を思っているかのような口調で。

「
久々だね…皆に逢うのも…」

女は呟いたのち、その港を後にした。

女が向かう先にあるのはライトに照らされたターミナルのある町。

ちよつとばかり荒れている人情厚い町。

かぶき町。

そこにいるのは女の目的でもある人物が住んでいる。

銀色の髪を持った男が……。

第1訓 面倒事は人に押し付けない（前書き）

感想いただきました。本当にありがとうございます！
期待に応えられるように頑張ります！

第1訓

面倒事は人に押し付けない

プルルルル
...

それはある日のこと。

いつもの様にグータラしていた万事屋に電話が鳴った。

電話に出るのは大抵万事屋オーナーである銀時。

この時も銀時がめちゃくちゃ面倒くさそうに立ち上がり、受話器を取った。

「はい、万事屋ですけどー」

気だるげな声が言う。

新八は何してんだあんたは、仕事かもしんないんだぞとツッコむ。

まあ今は電話中だし、あえて口には出さなかったが。

銀時はそんなことおかまいなしに話を続ける。

「…おう、お前か。どした？いきなり」

銀時の台詞から察するに、電話をかけてきたのは知り合いだろうと予想する新八。

とりあえず続きを聞くことにする。

「……………んだよ、そんなの警察にでも届けりゃいいだろ。

……………俺に？どんな奴だ、そいつぁ。……………分かったすぐ行く」

銀時はそう言つと受話器を元に戻した。

いまいち話に呑み込めない新八。

ちなみに遅くなってしまったが神楽は定春と一緒に遊びに出掛けている。

「で？誰からだったんですか？」

新八が木刀を腰にさして玄関へと向かう銀時を目で追いながら聞く。

「んー？月詠からだよ。なんか吉原に迷子が来て、そいつが俺に会いたがってるらしいから出るわ。」

あ、留守番よろしくぱっつあん。神楽帰ってきたら俺が居ない理由伝えといて」

いっぺんにそう言った銀時は戸を開け、万事屋の外へと出て行った。

新八は返事すらできないまま見送る。

帰ってきて何か面倒事を持って帰らなきゃいいんだけど…。

心の中でそう呟いた新八であつた……………。

第1訓 面倒事は人に押し付けない（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
次回もお楽しみに！

第2訓 子供がもっているのは普通のおもちゃです(前書き)

今回少し行数の空きが多いかもしれません。

ご了承ください。

しかもあんま話進みません。

すいません。

第2訓

子供がもっているのは普通のおもちちゃです

銀時が向かっているのは吉原。

電話で呼び出されて向かっている。

先ほどの会話はこうだ。

『もしもし、わっちじゃ
』

電話の相手は前話で銀時が言った通り月詠から。

「おう、お前か。どした？いきなり」

『銀時か、丁度いい。実は主に依頼を頼みたくてな。迷い人が吉原に迷い込んだんじゃ。そやつを主に預かってもらいたい』

「んだよ、そんなの警察にでも届けりゃいいだろ」

『いや、なんでもその迷い人は主に会いたがっっておるんじゃ』

「俺に？どんな奴だ、そいつあ」

『それがそやつは名を名乗ろうとせんのじゃ。じゃが容姿は…そうじゃな、一言でいえば吉原で働けそうなくらいの美人じゃ。髪が長くて袴を履いとる。それから…月が好きじゃとも言いおった』

「
…分かった。すぐ行く」

…で、今に至るわけなのだ。

実は銀時は吉原に迷い込んだ女性に心当たりがあった。

月の好きな奴で自分に会いたがっているものなど限られてくる。

予想が当たっていれば、もう何十年ぶりの再会になるだろうか。

そう思いつつ銀時は歩く足を速めた。

さて場所が変わってここは吉原。

妙な色香を出す店がいくつも並んでいる中に日輪が経営している茶屋『ひのや』があった。

「銀さん！」

元気のいい子供の声が銀時を呼んだ。

振り向くとそこには晴太が。

だが、ただ何もせずに呼んでいるわけでも駆け寄ってきているわけでもない。

手には明らかにモザイクのかかる怪しい大人のおもちゃが…。

あれ？デジャブ？前にも確かああやって晴太が駆け寄ってきた記憶があるんですけど。

銀時の顔が自然に引き攣る。

「会いたかったよ銀さ……」

じゅっ

ぶすう！

予想は的中。

まあ見事に前と同じで晴太は石に躓く。

そして手にあつた大人のおもちゃは……

あの効果音から分かるように、ガラの悪いおっさんのケツにモロブツ刺さつた。

銀時の顔の影がめつさ濃くなつた瞬間だつた…。

第3訓 相手側の成り行きも知っておこう（前半）（前書き）

久々の投稿です。

今回は月詠視点でこれまでのことを振り返っていきます。

第3訓 相手側の成り行きも知っておこう（前半）

月詠は銀時に連絡をしたのち、吉原をぶらりと回っていた。

傍らには袴をはいた物静かな女性。

勿論月詠の部下ではない。

第一まだ名前も知らない謎の女性だ。

部下たちが偶然発見した女。

見つけた部下たちも不審に思い、とりあえず名を聞いてみたらしい。

だが女は答えぬまま無言。

部下たちもどうしようか悩んだ。

そこへたまたま通りがかったのが月詠だ。

部下たちは月詠に相談してみる。

と、女が突然動き出した。

音もたてない足で月詠に歩み寄る。

部下たちはとつさに身構えた。

女はそれを見ても顔色一つ変えず足を止める。

そしてこう聞いてきた。

「…あなた…この人たちの上司？」

月詠はそれを聞いて、一言「そうじゃ」と答えた。

女は暫く黙ったまま月詠を見据えていたが、それからなんの前触れもなくこう聞いてきた。

「……銀髪頭の馬鹿強い人知ってる？」

「何故そんなことを聞く」

「…会いに来た。けど何処にいるか知らないから…」

なんの感情も入らない言葉。

月詠はどうすべきか悩んだ。

もし、この女が銀時の知り合いではなく銀時を殺すためにやってきた刺客であれば今ここで倒さなければならぬ。

しかし、本当の知り合いならば会わせなければなるまい。

究極に等しい選択。

会わせるべきか会わさぬべきか…。

と、不意に女が話しかけてきた。

「…なんなら連絡して。知ってるんでしょ？私の探し人……」

「…！」

軽く目を見開く月詠。

確かに頭の中では悩みまくっていたが、顔には出していない筈だ。

それなのにこの女はそれを見抜いた。

何者なんだろうか…。

疑問が湧いてくる。

「…連絡するの？しないの？」

女が問い詰めてくる。

月詠は黙っていたが、暫くして口を開いた。

「ついてくるといい。一応連絡はしてみる」

そう言っつて踵を返す月詠。

部下たちは「お頭!？」と言っていたが仕方あるまい。

月詠も警戒心を解いたわけではない。

もし銀時が「知らない」と言ったら即仕留めるつもりだ。

女は相変わらず無表情のまま月詠の背を見ていたが、すぐに音をたてないまま後をついていった。

場所が変わってここは日輪の経営している茶屋『ひのや』。

月詠は女を店の外に待たせておいて、日輪にこれまでの経緯を話した。

日輪はすぐに話を飲み込み、電話を貸してくれた。

と、月詠が銀時が出るのを待っている途中、突然女が顔を出した。

「何をしておるんじゃお主。店の外で待っておけと言ったじゃろう」

「……もし、相手がどんな奴かと聞いてきたら……月が好きな奴と答えて。それで分かる筈だから……」

女はそう言つとまた店の外へと向かつていった。

月詠は初め、何を言っているのかさっぱりだった。

が、女の言つとおりであつた。

案の定銀時はどんな奴だと聞いてきた。

月詠は女の言つたとおりに答える。

すると銀時は「分かった」と言つて電話を切つた。

あれで知り合いなのが分かつたのだろつかと半信半疑になる月詠。

と、電話が終わつたとほぼ同時に女がまた顔を出した。

「…なんだって?」

「すぐこちらに向かうそうじゃ」

「……そう……」

女は無表情のまま。

さつきからずっとそうだ。

知り合いに会えるのにこの何の感情も写さない瞳。

元はとても綺麗なのに、一度も感情の変化がない。

言葉も最小限に少なくしている。

月詠も無表情といえば無表情だが、ここまで無表情ではない。

楽しいときは軽くではあるが微笑むし、驚いたりするときもそれ相応の反応をする。

なのにこの女はまるで感情のない人形のような…。

第3訓 相手側の成り行きも知っておこう（前半）（後書き）

はい、中途半端に終わっちゃいました。
時間がなかったんで残りは後半で。

第4訓

相手側の成り行きも知っておこう（後半）（前書き）

短いです。

第4訓 相手側の成り行きも知っておこう（後半）

「……ねえ……なんならこの街紹介してくれない……？」

女は唐突にそう言った。

「何を言っとるんじゃお主」

そう返す月詠。

当然の反応だろう。

「…暇…」

「なんなんじゃ主は…」

思わずため息が出る。

そりゃそうだろう。

暇だから街を案内しろ、だなんて…。

小学生か。

怪しい雰囲気醸し出しているかと思いきや子供っぽい考え。

なんなんだこの女は。

「……暇」

「知つとる」

「…じゃあ一人で歩きまわってきていいの？」

「それも許可できん」

「……なんで」

「名も知らん奴をそこらへんに放っておくなどできんからじゃ」

「……知らない人に名前を名乗るなって教わった」

「どんな親じゃ。確かに賢い考えじゃが……」

「……じゃあ会いに行く」

「はい？」

「……お頭さんも一緒ならいいんですよ」

「まあそうじゃが」

「…会いに行くから」

そう言うと女は歩き始めた。

音もなく。

「あ、ちょ…」

月詠も慌てて女のあとを追いかけて行った。

……もうすぐ会える……なんて心のなかで呟く女であった。

第5訓 再会の仕方もいろいろ（前書き）

ここからはまた銀さん目線で。

第5訓 再会の仕方いろいろ

ワイワイガヤガヤ……。

なんですかここは、お祭り会場かなんかですかなんて感じのざわめき。

その中心には銀時と晴太がガラが悪いおっさんに追いかけまわされていた。

「おんどりやアアアア大人の何ブツ刺してくれとんのじゃアアア!!」

「晴太アアア！お前もう金輪際あのモザイクおもちゃ持つな！毎回回なんで誰かのケツに刺すの！！何がしたいんだお前は！何プレイがお望みなんだコルアアア!!」

銀時が汗だくで晴太に叫ぶ。

「俺に聞くなよ！大体銀さんだって追いかけてんじゃん！共犯者じゃん！」

「おめーが無理やり共犯者に仕立て上げたんだろーがアア！！」

「そこの銀髪頭アア！！責任とれやコルアア！！俺のフライド返せやアア！！」

と、ここでガラの悪いおっさんもコントに参加。

「フライドってなんだアアア！？俺はおめーからフライドなんて意味不明なもん奪った覚えはねーぞオオ！？」

「銀さん、それもしかしてプライドじゃ……」

「だ、そーだぞおっさん！おっさんはプライドって言いたかったのか！？そーなのか！？」

そう言って振り返る銀時と晴太。

勿論走りながらである。

そこにいたのは

涙目になりつつ走っているガラの悪いおっさんであった。

「っておいイイイイ！！泣いちゃってんの！？え、俺達のせい！？」

銀時が言う。

「俺達って何！？それ俺も入ってんの銀さん！俺もセットなの！？」

「あつたりめーだろオオオ！？誰のせいでこうなったと思ってんだ
！！」

「泣いてねーもん！汗だもん！！」

「いい歳こいたおっさんが気色わりー声出してんじゃねーよ！！ぶ
っ飛ばすぞ！！」

「追い打ちかけてどーすんの！！」

なんて言ってるうちに相手も息があがってきたのかスピードが落ち
た。

やっぱおっさんはおっさんである。

もうすぐこのくだらない追いかけっこも終わるのだろうと思う銀時。
が、しかし。

躓きました。

おっさんが。

おっさんならいいんじゃない？なんて思うことだろうがここで問題ひとつ。

そのおっさんの手にはさつきケツに刺さってたあのモザイク品。

それが躓いた拍子に今度は銀時のケツへと一直線に向かってきたのである。

青ざめる銀時。

やべえっと思い目をつむる。

ドカッ！！

どこか違う効果音が辺りに響いた。

第6訓 久々の再会に絶対零度の目はやめて

観衆は息をのんだ。

いや、軽く悲鳴といってもいいだろうか。

とにかくそんなのがあったのだ。

その原因の一つはモザイクおもちゃ。

まあこれは付き物だろう、今までの経路でいくと。

それとも一つ。

銀時のケツ…ではない。

そんなことがあつたらまずガラの悪いおっさんを鼻フックデストロイヤーの刑に処します。

原因のもう一つは銀色に鋭く光る一本のナイフだった。

一体どうして驚く声があがったのか。

それはそのナイフがモザイクおもちゃに刺さり、あろうことか数メ

―トル先の壁に縫いついていたのだ。

そのおかげで銀時のケツが守られたわけなのだが…。

観衆や晴太、銀時はナイフが飛んできたほうを向いた。

そこに立っていたのは

月詠と

長い髪をなびかせた美人の女性であった。

「月詠姐！」

晴太が言う。

「……さ、又奈？」

銀時が女を見て言った。

女はただ無言で銀時を見る。

「……………」

気のせいであろうか、目が絶対零度の様に冷たすぎる。

銀時の顔が自然と引き攣る。

そして女は一言。

「
……
ハア
……」

絶対零度の目でため息をつかれた。

第7訓 人を実験台にするな

叉奈はまさに輕蔑の目で銀時を見下した。

「…何してんの？」

ぽつりと呟きにも近い音量で言う叉奈。

「えーと…お、鬼ごっこ」

「……いい歳したおっさんが…」

叉奈はそう言うすとすたと銀時の横を通り過ぎ、ナイフとモザイクおもちゃが刺さっている壁の方へと向かって行った。

「うむ、どうやらその女と銀時は本当の知り合いだったようだな」

と、ここで月詠が一言。

「月詠姐、あのお姉さんがどうかしたの？」

晴太が聞く。

「いや、なんでもあの女、銀時に会いに来たようじゃがなかなか名を乗ろうとせんのだ。それで怪しいと見たのじゃが…無駄だったようじゃ」

「へえ…」

晴太はそう言つと銀時と女の方を見た。

叉奈はナイフを抜くと懷からハンカチを取り出し、綺麗にナイフを拭いた。

「お前いつからいたんだ？」

銀時が聞く。

あくまでおそろおそろだが。

「…おっさんのケツにコレが刺さった時から」

そう言つてモザイクおもちゃを手に持つ叉奈。

「ほとんど見てたんじゃねーか今までの過程！」

「…そーだよ。だから拭いてる」

キュッキュといい音を鳴らしてナイフを拭く叉奈。

ナイフはもうピカピカを通り越してペツカペカである。

「…さて…」

そう呟いたのが銀時には聞こえた。

アレ？確か叉奈がそう呟いた時って…。

なんとなく背中に悪寒が走る銀時。

そうだ。過去の記憶が正しければいまからされることに予想がつく。

ストン。

ピッ！

シュッ！

「……うん。オツケー」

「何がだアアアア!!」

又奈の一言に銀時のシャウトが入る。

銀時の頬には赤い線が一本。

又奈はダーツをした後みたいなポーズ。

そして壁にさつきまで磨かれていたナイフが刺さっている。

この状況でお分かりになるであろうか。

要するに、投げられたのだ。

又奈が銀時にナイフを。

「…何って切れ味確認だけど…」

又奈が銀時の言った台詞に答える。

それもさも当然のように。

「当たり前みたいな顔で言うなアアア！！人を実験台にすんなって何度言ったら分かるんだ！」

「…まだ一回目でしょ？」

「昔の入れたら何百回目だと思ってやがる！」

「過去に囚われてちゃダメだよ」

「それただ単に忘れてただけだろ!!」

ギヤーギヤー言いあう2人。(というか銀時が一方的に叫んでる)

周りから見れば痴話喧嘩みたいでとても滑稽である。

面白いからもう少し見ていようと思った月詠であった。

第8訓 自己紹介が苦手な人は必ずいる

「はあ…主らは子供か」

月詠は溜め息をつきつつそう言った。

言われたのは苦無がおでこに突き刺さり正座をする銀時とその隣で
きちんとやはり正座をした叉奈である。

苦無を投げたのは勿論月詠なわけで。

近くには車椅子に座る日輪と晴太。

今5人は『ひのや』の外にいる。

いつまで経っても喧嘩をやめない銀時と叉奈に月詠が痺れを切らし
て苦無を投げてストップさせたのだ。

まあ流石に女性のおでこに刺すのはいけないだろうと思い、あえて

銀時にのみ刺したのだが。

そして今現在。

月詠は2人にお説教をした。

その迫力に大人しく正座をして聞いていた銀時と叉奈はまあ見事に子供で。

「まあまあ月詠。説教はそれくらいにして」

日輪が言った。

「だが日輪……」

「私達、まだその子の名前知らないし、自己紹介してもらおうじゃないか」

「…え…自己紹介……？」

と、ここで叉奈がポツリと呟く。

その声は銀時の耳に届いていた。

あ、そーいやーコイツ自己紹介とか嫌いだっただけか。

攘夷戦争の時名前なかなか教えてくんなかったけ…。

と、昔のことに思いを馳せる銀時をよそに叉奈は苦戦していた。

あくまで顔には出さなかったが。

「じゃあ自己紹介よろしく、お嬢さん！」

日輪が輝くような笑顔で言った。

その笑顔も叉奈にとっては憎たらしく思える。

「ほら、頑張ってお姉さん！」

晴太も後押し。

渋々叉奈は日輪と晴太、月詠の前に立った。

「…え、と…」

口ごもる叉奈。

何から話せばいいのか全く分からない。

「バーカ、まずは名前だろーが」

ぼそり。

銀時が日輪たちの後ろで囁く。

耳のいい叉奈はそれをなんとか聞き取り、そうかと思った。

ちなみに現時点で銀時への感謝の気持ちは全くない。

「……な、名前は…蒼狗田…又奈……」

軽く噛みつつ言う又奈。

又奈は又奈で恥ずかしくて今すぐにもナイフを周りに投げまくりたい気持ちに駆られていた。

誰もそんな危険なことを考えている又奈のことなど知らず言葉の続きを待っている。

「……………」

「え？つ、続きは？」

晴太が思わず口を開いた。

又奈はさっきの言葉から一度も声を発さず俯くばかりで。

「
…以上」

「待て待て待て！短いわ！」

咄嗟にツッコんだのは銀時。

叉奈がちらりと銀時を見る。

「だってこれ以上話すことないし……」

「だからってこんな悲しい自己紹介あつてたまるかアアアア！！」

ああ、また喧嘩が始まる。

月詠と晴太はそう予想した。

が、意外にもそうはいかず。

「ねえ又奈ちゃん？」

話しかけたのは日輪。

又奈は視線を銀時から日輪へと移した。

相変わらず無表情。

「……なんでしょう」

「あなた、何か得意なことってある？」

「……得意なこと？」

「そう。あつたら教えてほしいな、と思って」

日輪がニコニコしながら言う。

叉奈は至って悩む仕草もなく、黙って日輪を見たあと、ゆっくりと口を開いた。

「…な、ナイフ投げ……」

今までにないくらい小さな声で言う叉奈。

どうやら相当恥ずかしかったようだ。

「あらそうなの？」

「……はい……」

叉奈はまた俯いた。

と、ふと日輪の頭によぎる一つのアイデア。

「ねえ、又奈ちゃん。今からそのナイフ投げ、見せてくれない？」

第9訓

特技が人の命に関わることだってあるんだよ!!

(前編)

(前書き)

細かく分けすぎました。

第9訓 特技が人の命に関わることだってあるんだよ!!!(前編)

「…え？」

叉奈は思わずそう聞き返した。

日輪は相変わらず満面の笑みである。

「…え…と…それは…どういう意味で…」

「まんまの意味だよ。そのナイフ投げ、見たいからさ」

日輪が叉奈の問いに答える。

「…い、いい…かな？」

「疑問形？」

銀時が思わずツッコんだ。

叉奈は暫く黙ったのち、決心したようで。

「…いいです…」

「あらホント？ありがとう、叉奈ちゃん」

日輪と晴太は目を輝かせた。

が、叉奈のほうはというと…。

「……そのかわり、銀髪が犠牲だから……」

「え」

さりと銀時に身代わり、といつか生贄になれ宣言をしていた。

第9訓

特技が人の命に関わることだってあるんだよ!!

(前編)

(後書き)

短っ!!

第10訓 特技が人の命に関わることだってあるんだよ!! (後編)

「…なんでこうなったのかなー？」

銀時が呟いた。

銀時は今、身動き出来ないように縛られている。

頭の上には何故かトマトが。

向かい側約7メートル位先には相も変わらず無表情の叉奈。

だがただ突っ立ってるわけではない。

その手には銀色に光る鋭そうなナイフが。

「……だから言ったじゃん。犠牲になれって……」

又奈はそう呟いた。

「いやいやいや、確かに聞いてたけども！」

そう言っても何も動く銀時。

「動くな。刺すぞ」

又奈のなんとも物騒な言葉が飛んできた。

銀時はすぐさま動きを止める。

説明が遅れた。

要するに、である。

銀時は選ばれたのだ。

恐ろしいナイフ投げの実験台に。

だから頭にトマトが乗っており、向かい側にナイフを持った叉奈がいるのである。

なんでトマトなのかはツツコまないでいてほしい。

「てかよー縛る必要ねーんじゃないか？俺縛られるより縛りたいんですけど」

「…縛ってもいいけど、私にそんなことしたらあの世行きだから」

「すんまっせん」

「そろそろいいかしら、お二人さん？」

と、叉奈と銀時の会話を制したのは日輪だ。

「又奈ちゃん、それじゃ早速お願いしていいかしら？」

「…ん」

又奈はこくりと頷いた。

ナイフを持ち直し、銀時のほうを向く。

銀時自信、そこまで恐怖心はなかった。

それほど又奈のナイフ捌きは信用できた。

「外すんじゃないぞ」

銀時がへらりと笑って又奈に言った。

「そこまで墮ちてない」

又奈が言った。

す、とナイフのある腕を顔の横に持っていく。

そこから早かった。

ストーン、という音がしたかと思うと、ナイフは既に又奈の手にはない。

ナイフは見事トマトのど真ん中に突き刺さっていた。

銀時にはかすり傷一つついていない。

「…だから言った。堕ちていないって」

又奈がぼつりと言った。

銀時がニヤリと笑う。

「みてーだなオイ」

その後、日輪と晴太のすごい、という台詞を又奈は散々聞かされる羽目になったのは言うまでもないことである。

第11訓

迷子Ⅱ厄介事っていう公式成り立つ気がする

「……疲れた」

又奈がぼつりと呟いた。

又奈は今、銀時と2人でネオンの光る繁華街を歩いていた。

あのナイフ投げ披露後、軽く雑談をした又奈と銀時は空が暗い藍色に染まる頃、そろそろ万事屋の子供たちが心配するだろうというところで帰路に着いたのだ。

又奈は日輪と銀時の相談の末、万事屋に居候することに決定した。

まあ又奈自身も泊る気でいたし、特に反論もなかった。

で、今に至るといわけなのだが…。

空はもうすっかり暗くなっていた。

月は満月から少し欠けた感じで、ぽっかりと夜空に浮かんでいる。

「…眠らない街って本当にあっただね」

又奈が銀時に言った。

「まあな。ここらへんは特にそうだ」

銀時が小指で鼻をほじりつつ答える。

又奈は正直こういう人混みが苦手だ。

だから都会には絶対に住みたくないと思っている。

人混みの中にいると怖い。

自分がどこかへ流されて行ってしまうそうだから。

だから近くに知っている人がいるととても安心できる。

自分はここにいるのだという実感が湧く気がする。

又奈はボーっと自分の考えを思い返していた。

徐々に多くなっていく人ばかり…。

「…アレ？」

気がつくとそのは見知らぬ路地裏。

さっきのネオンが光り輝く場所とは一転してこの暗さ。

ああ、やっちゃった。

さっきまで人混みに流されては駄目だとか謳ってた傍からこの状況。
つくづく思う。

自分ってなんてバカなんだろう……。

顔には出さなかったが、内面かなり焦っている。

銀時は見えないし、ここが何処だかわからないし、どうすりゃいいんだ。

「…はあ」

溜め息をついた。

一つついたってバチは当たらないだろう。

夜目が効く叉奈は幸いにもこの暗闇にすぐ慣れた。

だからといって何か状況が変化するわけではないが。

さて、これからどうしようか。

すんなりと切り替える叉奈。

ここがある意味いいところだと思う。

叉奈は辺りをざっと見渡した。

見たこともない所。

こついう場合、又奈の頭の中では解決策が一つ。

知らない所は散策するのみ！！

そつと決まれば即行動。

又奈はなんの躊躇もなしに路地裏のさらに暗いところへと歩き出した。

第12訓 只今絶賛後悔中

言ったからには行動します。

決断はしたものの…

やっぱりジツとしとくべきだったと只今絶賛後悔中。

何故後悔しているのか、というと。

絡まれたからです。

しかもよりにもよって天人に。

なんなんだ今日は。

なんでこんな災難にばかり降ってくるのだ。

相手が何か話してるが、今の又奈の耳には入るわけがない。

畜生、こんなことになるんだったら上京してくるんじゃない。

大人しく家で寝てりゃよかったんだ。

どうせいつも暇だし、いつでも会いに行けたのに。

こうなったら今から八つ当たりでもしようか。

あ、でもなんか警察沙汰にはなりたくないしな…。

こうサクッとピンポイントで刺したいんだけど…。

いよいよ恐ろしいゾーンへと入る思考。

が、それは途中で遮られた。

そう、自分より10センチ以上背の高い天人の一人によって。

「てめえ、さつきから黙りこくりやがって！少しくらい反応してくれてもいいだろーが！」

天人の一人が何故か逆ギレ。

「…何？相手してほしかったわけ？」

カチンとムカついた又奈は相手を煽ってみる。

「ち、ちげーよー！」

どうやら凶星らしい。

相手は顔が真っ赤になっている。

ちなみに、又奈の向かい側にいるのは一人ではなく五人くらいのグループだ。

そりゃ赤くもなるだろう。

「か、顔が真っ赤に……」

「よっぽど恥ずかしかったんだろうな……」

仲間たちが後ろでばそばそと言う。

そのせいで顔は余計真っ赤に。

「う、うるせーよめーら!」

赤くなっていた天人が仲間の間に入って言った。

「……………」

この様子だと今のうちに逃げた方が賢明かもしれない。

又奈はそう考えた。

くるりと来た道に戻る。

…ことが出来なかった。

何故なら腕を強く掴まれてしまったから。

「…離してくれない？」

掴まれてもなお自分の立場が分かっていないようなこの態度。

我ながら凄いと又奈は思った。

「いい度胸じゃねーか、何もしないままハイさようならなんてよ」

先ほどまで真っ赤だった天人が言う。

「さっきまで真っ赤だった奴が言うな」

はつきり言う又奈。

仲間たちが笑いをこらえているのがわかる。

「~~~~っ！~！」の…っ」

天人の堪忍袋の緒が切れたらしい。

遂に殴りかかってきた。

横から叉奈の顔面に向かって拳が飛んでくる。

ドガシャアアンー！！

拳は横へと振り切り、コンクリートの壁を粉々に破壊した。

「あんまり調子に乗んじゃねーよこのアマ……」

天人はそう言ってニヤリと笑みを浮かべた。

が。

「随分余裕だね」

真上からさっきと何も変わらない冷静な声が降ってきた。

第13訓 やりすぎ注意！！

又奈は天人の真上にいた。

「なっ……！」

天人は思わずそう声をあげた。

咄嗟に身構える。

が、又奈のほうが早かった。

又奈は素早く袖からナイフを何本か出し、指に挟んだ。

「遅い」

呟くと同時だった。

ナイフは手から放たれ、天人に向かっていった。

カッ、カカカッ！！

ナイフは地に刺さった。

天人の服の裾を縫い付けて。

物凄い力だった。

天人はナイフの力で半ば強制的に座ってしまった。

叉奈はすどん、と軽く音をたてて着地した。

そして再びナイフを今度は両手に用意。

「…今度は刺すよ？」

そう言う叉奈にやられていない天人たちは一瞬ビクツとなる。

だがどういいうわけか天人たちは引き下がるところか勢いづいたように構えた。

「こ、こんなとこで女一人にやられてたまるか!!」

「そうだそうだ!!」

天人の一人がナイフで縫い付けられた天人を助ける。

叉奈は溜め息をついた。

「いいよ、相手してあげる。だけどあとで後悔しても知らないから」

これで警察に通報されても口実が出来る。

心の中で付け足す又奈。

「調子にのんなこの……！？」

先ほど縫い付けられた天人が叫んだ。

が、途中で言葉が途切れた。

仲間たちが何事かと見てみる。

その天人の腕には銀色のナイフが数本刺さっていた。

「川の…何？」

又奈はナイフのある手を構えて言う。

「かかってきなよ。これじゃつまんない」

ナイフの刺さった天人は呻き声をあげてその場につづくまった。

「なんなんだコイツ…」

後ろに控えている天人が言った。

声が震えている。

「びびんじゃねえ!!!まぐれだ!あれが刺さったのは!!!」

一人が叫ぶ。

叉奈は心の中で思った。

馬鹿だ、こいつら。

これ以上自分と闘りあうなら死を覚悟してもらわなければならないというのに。

叉奈の目に殺気が籠った。

天人たちはそんなことすら知らず襲いかかるよう構えていた。

「やっちまえエエ!!」

天人の一人が叫んだ。

それに合わせて仲間たちが一斉に走り出した。

叉奈に向かって。

「やれるなら…の話だけど？」

又奈はそう言ってナイフを投げるスタンバイをした。

そしていざ投げようとしたその時。

「何してんだてめーら!!」

鋭い声が飛んできた。

第13訓 やりすぎ注意!! (後書き)

うわ、自分で書いといてなんだろコレ…。
又奈怖い。。

第14訓

ニコチンはキレやすいかつ騙されやすい

又奈は声のしたほうを振り返った。

そこには見たこともない男性が一人。

腰に刀を刺しており、黒い制服みたいなものを着ている。

髪の毛も黒く、目は瞳孔が開いていて怖い。

口に煙草をくわえているその男はざっとこの状況をみるとすぐさま叫んだ。

「こんなところで何してやがる！しょっぱかれたくなかったらさっさとどこか行け！！」

とても迫力のある声に怖気づく天人たち。

「ち…っ。行くぞ！」

天人たちは腕を刺された仲間を背負うと路地裏の奥へと走り去っていった。

「ったく…」

男は溜め息をひとつつくと又奈のほうへと歩み寄ってきた。

又奈はナイフを隠す素振りもせず、男を静かに見やる。

「オイ、お前」

男が話しかける。

「……何？」

「名前は？」

「……アンタ誰？」

「は？」

「……普通、自分から名乗るもんじゃないの。人に名前を聞くときは」

「な……っ」

男が一瞬たじろぐ。

又奈は相変わらずナイフを持ったまま言葉を続けた。

「アンタ、侍なんでしょ？それぐらいの礼儀はわきまえたら？」

カチンとくる男。

「てんめ…あんま調子に乗るんじゃないねー…」

「そうやってらさっきの天人と同じ風になるよ？」

刀に手をかけかけた男に又奈が言う。

「ち…俺は土方だ」

土方はとうとう参ったのか、名を名乗る。

「ほら、名前言った。お前の名前は？」

「…その前に役職は？」

「…は？」

「だから、仕事何してるのかって聞いてる」

土方の眉間に皺がよる。

「なんでんなこと…」

「信用できないから。制服着てるんだし、なんかの仕事はしてるんでしょ？」

「…まあ…」

「なら教えて」

「俺は真選組副長してる」

「…そう」

「おら、言つたる。今度こそ名前言え」

「…蒼狗田」

「下の名前は？」

「言わなくてもいいでしょ？」

「…ち。仕方ねえ。とりあえず蒼狗田。お前屯所来い」

「…なんで？」

「さっきの天人たちに絡まれてたろ。それで事情聴取する」

「…別に大した事件じゃないのに…」

それにあのままいけば八つ当たりも出来たというのに、と心の中で付け足す叉奈。

「いいから来い！」

「……はあ……」

「溜め息つくな！」

「…ん」

土方の一喝に又奈は黙ることにした。

真選組：警察ならついでにあの銀髪の行方でも探してもらおう。

迷子だし、丁度いい。

そう計画をたてつつ又奈はなんだかんだで土方についていった。

第15訓 言葉の受け取り方も人それぞれ

「真選組屯所」

又奈は掲げられている看板を小さな声で読み上げた。

辺りはもう真っ暗。

時刻は8時といったところだろうか。

又奈は土方に連れられて真選組とやらにやってきたのだ。

勿論、どんなところなんて知りもしない。

ただ心の中で思うのは、こんな瞳孔開いた如何にも怖そうな人が副長なんだから絶対下の人苦労してるんだろぅなということ。

案外その考えは正解といえるだろう。

さてそれはさておき。

事情聴取とやらがあるなんてこのヘビースモーカーは言っていた気がする。

めんどくさいな。

適当に返答しよう。

又奈はそんなことを考えつつ土方の後ろをついていった。

屯所内はまあ広がった。

ふらふらしてたら迷うんじゃない？てなくらいに。

きつと大勢の隊士がいるせいなんだろうなと又奈は思う。

又奈は草履を脱ぎ、床にあがった。

そしてまた土方の後をついていく。

なんかこうしてると迷子の子供みたいだ。

…悔しい気もする。

だが仕方がない。

マジに迷子なのだから。

いろいろ思考錯誤（その大半は下らないこと）する。

と、不意に土方の足が止まった。

驚いて己の足も急ブレーキをかける。

ギリギリ当たらずに済んだ。

「ほら、ここに入れ」

土方が言った。

又奈は頭にクエスチョンマークがつきそうな顔をした。

「…ここに？」

又奈がまだ戸の開いていない部屋を指差す。

見たところ普通の部屋だ。

牢屋には見えない。一応。

「ああ。さっさと入れ」

土方が一回で聞かない又奈を軽く睨んで言う。

「…何する気？」

「事情聴取に決まってるんだろ！！なんだその目！なんか俺がいやらしいことをするみたいないやがって！！」

土方がツッコむ。

「だって電気付いてないし言い方がなんか…」

「普通の言い方だったろ！！」

なんか銀時に似てるなと又奈は思った。

ツッコみの仕方とか。

と、その時。

「アレ、トシ？何してんだそんなところで」

太い声が土方の向こう側から聞こえてきた。

第16訓 真選組は動物園ですか（前書き）

お久です！

ちなみにサブタイトル提供者は又奈です。

第16訓 真選組は動物園ですか

「…？」

又奈は声のする方、土方の向こう側を覗いた。

土方も振り返る。

「近藤さん」

土方がそう言う。

近藤さんと呼ばれたその男。

その男の第一印象。

「…ゴリラさん?」

「ゴリラさんじゃねえ近藤さんだ!」

又奈の台詞にすかさずツッコむ土方。

近藤はガハハと笑う。

「まあまあいいじゃないか!」

「いいのか近藤さんよ…」

土方は溜め息をつく。

「それよりもトシ。そこのお嬢さんはどうしたんだ?」

近藤はすぐさま話を変える。

とりあえずプラス思考な人だからなのだろうか、気にしていない様子。

「…お嬢さんなんて年じゃない」

又奈が言う。

「ああ、近藤さん。実はこいつ天人に絡まれててよ。そのことについてちょっと気になったことがあるから事情聴取するんだ。近藤さんはどうする？」

土方がさっとお仕事モードに戻った。

そこらへん流石ですね、なんて思う又奈。

「そつだなあ…これからお妙さんのストーキン…警護に行かなきゃならんし…」

「……」

「…分かった近藤さん」

又奈は冷たい目で近藤を見る。

もとからだろとか言わない。

「じゃあなトシ！あとで報告よろしくな！」

近藤がゴリラらしく…じゃなくて男らしく？豪快に笑ってその場を去った。

「…あのさ」

「なんだ？」

「真選組って何？」

「だから、江戸の治安を守る……」

「……まずは常識守ってほしいんだけど」

「……………」

反論できない土方。

又奈は何も言わせないような目で土方を見る。

「……事情聴取取るぞ」

土方はそう言って部屋に入った。

又奈もあとからついていく。

真選組「動物園なんて公式を思い浮かべつつ。

第17訓 煙草は百害あって一利なしって言つてしょ？

又奈は今、電氣のついた至つて普通の和室に瞳孔開き気味の副長とやらと一緒にいた。

机を挟んで向かい合う形で座っている。

土方は煙草をくわえると火をつけた。

又奈は煙草の匂いが大の苦手だ。

先ほどは外であり、そこまで臭わなかったが今は室内である。

煙はもくもくと部屋の上へと昇っていく。

土方はなんの悪気もなしに当たり前の如く煙を吐いた。

煙の匂いが又奈の鼻をつく。

「……………」

又奈はキレそうになりのを抑える。

ここは仮にも警察だ。

ゴリラとかいたけど。

ゴリラいたけど警察だ。

ここでキレたら当初の目的も果たせないまま牢獄行きか実家強制送還になっちまうんだぞ。

それだけは勘弁。

そう自分の中に言い聞かせ、土方と目を合わす。

「じゃあ早速事情聴取とらせてもらうが…」

土方が言った。

又奈は無表情で小さく頷く。

「まずは…名前を教えろ」

「さっき言った」

土方の台詞に光の速さで言う叉奈。

正直自分の名前とか何回も繰り返したくない。

だってなんか恥ずかしい。

「そうじゃなくて…さっき言ったのは名字だけだろ。下の名前も教えてるって言うてんだ」

叉奈の素早い返答に少しばかり驚いた土方は呆れつつ言う。

下の名前？

あれ、さっき言わなかったか？

「…言ってなかったけ？」

「言っ
てねえよ！
忘れたのか！」

「……
忘れたみたい」

「他人事
みたい
に言っ
たな……」

又奈は何かおかしいかと言わんばかりの表情をする。

（とはいえあまり変わらない顔だが）

「…言っ
たのやだ」

「ガキか
てめえは……」

土方は思った。

なんやねんこいつ…と。

関西弁なのはスルーしていただいて結構である。

さつきからやけに掴めない。

何が？といわれるとそりゃもう全部かもしれない。

性格がまず分からない。

初めて又奈を見たときはまるで別人のようなオーラを出していた。

大人っぽいというか、近寄りがたいオーラの何が。

それが今はどうだろう。

子供の様な台詞を吐いているのである。

…ってあれ？こいつ、誰かに似てね？

土方はふと思う。

このわけの分からない性格。

そうだ。

この何気に呆れそうな性格はあのポップコーンヘアーの男とそっくりではないか。

「……あのさ」

と、不意に聞こえた少し高めのボーイソプラノの声。

はっと目を瞬かせると、そこには無表情の例の女がいた。

「事情聴取これで終わり？早く知り合いと合流したいんだけど」

又奈はそう言うतすつと立ち上がる。

土方は慌てて立ち上がった。

「バツ…これで終わりなわけねーだろ！！これ事情聴取っていわねーよー！！」

「だってあんたさっきから黙ってるし…」

又奈のいぶかしげな目が土方を見る。

「それは考えごととしてただけだ！ほら、早く座れ！さっさと終わらせたほうがいいだろ！」

「……………」

又奈は無言でもといた場所に座る。

ただどさっきより不機嫌になったのは分かる。

だって空気重くなった。

「…あのさ」

又奈が声をかける。

「は、はい！」

どついうわけか敬語で返事をする土方。

声が明らかに怒ってる。

「……事情聴取真面目に受けるから、煙草やめてくれない？」

「は？」

又奈のいきなりの爆弾発言にぽかんとするポーカーフェイス。

「…聞こえなかった？煙草やめろって言ってるの」

「なん…」

「百害あつて一利なしって言葉聞いたことないの？さっきは屋外だったから許したけど、今ここは室内。たまには周りの人の事も考えてよね？」

土方の反論の言葉を遮って又奈が言い放った。

啞然となる土方であつたが負けず嫌いがここで反論しないわけにはいかない。

「なっ…何言つてやがる！煙草吸うなつてのは俺にとっちゃあ死ねつてのと同じなんだぞ！！分かつてんのか！」

目を吊り上げて言う土方。

又奈は無表情で土方を見据える。

「
……」

「なんだよその目は……」

ジッと見つめる叉奈に一瞬たじろぐ土方。

「
……そう」

少し間をおいてから口を開く叉奈。

土方は「なんだその反応は!」と言おうとした。

が。

ストーン。

「なら、死んでみる？手伝ってあげるよ？」

髪がはらり、と土方の膝に落ちた。

第18訓

何者かなんてきつとすぐ分かるよ

土方は思わず身を固めた。

目を見開き、又奈の方を見る。

又奈は右手をあげていた。

まるで何かを投げたようなポーズ。

土方には何が投げられたか、少し遅れたが分かった。

銀色に鈍く光るナイフだ。

ナイフは土方の頬をぎりぎり傷つけず、髪だけを切って壁に刺さった。

「な……にを……」

途切れ途切れの言葉で言う土方。

又奈は何も言わない。

土方には信じられなかった。

何せ又奈のナイフを投げるまでの一連の行動全てが土方の目に写らなかったのだから。

反射神経のいい自分が何も気付かなかった。

「お前…何者だ…？」

それが今率直に言えること。

「……ただの通行人」

又奈は表情ひとつ変えずに答えた。

「ただの通行人がこんな動きするわけねーだろ！？俺でさえ反応出

来なかったんだ…お前、一体…」

土方が言う。

叉奈はすつと立ち上がると、壁に突き刺さったナイフを抜き取った。

「……叉奈」

「は？」

「……あんたらの情報収集ならすぐ分かる」

叉奈が土方を見下ろして言う。

「何言ってるのかさっぱり」

「税金ドロオオオオオオオオオオ!!」

土方の台詞を遮って聞こえたのは甲高い聞き覚えのある声。

「……………」

又奈には初めて聞く声なのだろう、頭にクエスチョンマークつけそうな顔をしている。

が、その顔もすぐに変わった。

ある男の声で。

「おい、いるんだろ、出てこいよ」

気だるげな声が聞こえた。

土方のこめかみに青筋が浮かぶ。

「誰が税金ドロボーだアアアア!!しょっぴくぞオオオオオ!!」

土方シャウト。

そんなに叫んで頭痛くならないのかと言っほど。

そして猛ダツシュで表へと出て行った。

「…行くか…」

又奈もそう呟いてのっそりと部屋から出た。

暗い藍色の空には中途半端に欠けた月が浮かんでいた。

第19訓 気付けば子持ちになってました

時刻は夜9時だろうか。

又奈は縁側を歩きつつそう思った。

声は相変わらずぎゃんぎゃんと聞こえてくる。

先ほどムカついてナイフを投げた相手と自分の知る限りでは頭が理科の実験で爆破したんだろう頭の男の声がする。

きつとその2人の口喧嘩だ。

のんびり考えながら声のするほうへと歩いていく又奈。

段々と言葉がはつきり聞こえてくるぐらい近づいてきた。

「だーかーらー！俺ア人探してもらったためにわざわざこんなおっさ

んくさい税金泥棒の巢にやってきたんだろーが！！人の話聞け！」

爆破頭の声だ。

てか夜中なんだからもっと声抑えろよ。

と、又奈は思う。

「知るかボケエ！！大体てめえはその態度なんだ！それが人に頼む態度なのかコルア！なんでんな上から目線なんだ腹立つなアア！！」

ニコチン野郎の声。

アンタ警察なのに何全力で近所迷惑なことしてんだ。

と、又奈は思う。

「あーもう、やめてくださいよ2人とも！大人げない」

「そうヨ。近所迷惑の塊ネ」

と、ここで又奈の知らない声が大人げない2人の喧嘩の間に入った。

一人は少年の声、もう一人は少し中華ななまりの入った少女の声だ。

又奈ははて？なんて思う。

銀時の子供だろうか。

しかし子供どころか妻が出来たという知らせは聞いてない。

ならあの声は？

又奈は2人の容姿で決めようと思い、歩く足を速めた。

2人の口喧嘩も少し落ち着いたようだ。

音量が少しばかり小さくなった。

又奈はきっと次の角を曲がると騒がしい奴らと会っただろうと思っ

足音は癖なのかなかなか音をたてない。

ていうか。アレ？

自分いつから足音たてないようにしてたんだっけか？

まあいいか。

マイペースな又奈は勝手に疑問を浮かべるとさっさとその疑問を燃えないゴミコーナーにポイ捨てした。

…もちろん頭の中、である。

そして又奈は、角を曲がった。

そこには夜に目立つサーモンピンクの髪色をした少女と地味な少年がいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7886s/>

蒼き月夜

2011年10月9日00時43分発行